【 23 】

氏　　名	桑原佳代子（くわはら かよこ）
学位(専攻分野)	博　士（文　学）
学位記番号	文博第 138 号
学位授与の日付	平成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科梵語学梵文学専攻
学位論文題目	『薬師経』の目指した大乗仏教 ——転輪聖王・八支斎——
論文調査委員	(主査) 助教授 小林信彦　教授 御牧克己　教授 荒牧典俊

論文内容の要旨

本論文は二部から成り，そのうち第一部は二章から成る。『薬師経』のテキストが被った変化を跡づけようとするものであるが，その際に中国語訳を資料として積極的に使っている。インド文献『薬師経』は，時代を隔てて四回も中国語訳が作られたが，その一つ一つをサンスクリット本と比較することによって，次第に大乗色を強めながらテキストが変化していったことを明らかにしようとするものである。

第一章第一節で『薬師経』の諸本について記述した後，第二節で『灌頂経』第十二巻を取り上げる。まずこの文献の全体構想に触れて，「禅定者を助ける呪文を集成すること」が課題であったと言う。この文献の第十二巻が『薬師経』に対応し，最も古い中国語訳である。続いて，慧矩訳『薬師経』の序文と『出三蔵記集』を再検討して，「抄撰」と呼ばれる作業について論じる。また，「続命法」と呼ばれている呪術を取り上げ，仏教古来の呪術パリッタと関連づけることができると言う。

第一章第三節では「瞑想」と「仏名」について論じられる。『灌頂経』第十二巻と比べて他の『薬師経』ヴァージョンで目立つ点は，「瞑想」が重んじられていることである。「瞑想」への言及が見られるのは，仏像礼拝を説く文脈の中であり，その際には薬師如来の名前を聞く効果も説かれる。テキスト発展のある段階で，「仏名」を聞くことに精神集中の効果が認められるようになったのである。中国語諸訳を比較検討してみると，この傾向が時代とともに強まることが分かり，最も新しい義浄訳で最も著しい。サンスクリット本の場合も，写本によって「瞑想」の記述の詳しさに異同が認められ，時代の差を反映していると考えられる。

第一章第四節で論じられるのは，「悪趣からの解放」についてである。死んだ後で心が「望ましくない身体」（悪趣）に移ると大きな苦しみを味わうことになる。サンスクリット本では「望ましくない身体」からの救済が繰り返し強調されるが，『灌頂経』第十二巻では否定されないまでも，それほど強調されてもいない。サンスクリット本と『灌頂経』第十二巻の間には，望ましくない身体からの救済をめぐって，立場の違いが認められるのである。

第一章第五節では「八項目を伴うウパヴァーサ」について論じられる。これは半月に三回行われる信者参加の儀式であり，順守すべき条項が八つあるので「八項目を伴うウパヴァーサ」と呼ばれる。『灌頂経』第十二巻に見られる「月六年三長斎」という表現は，「偽経」の目印のように言われている。敦煌で発見された中国文献に「三長斎」への言及があり，この行事を行うべき月として，中国で忌み月とされる五月と九月を挙げている。これを見た中国仏教の研究者は「三長斎」を道教の行事と決めつけたのである。しかしながら，これは初期仏教に溯る儀式にほかならない。

「八項目を伴うウパヴァーサ」の効果として初期仏教で説かれているのは，天国での再生などである。この際に神々を絶えず心に留めると，死後に天国に生まれるというのである。この点について『薬師経』では事情が異なる。天に住む神々のことを絶えず心に留める代わりに，『薬師経』では「無量寿如来のいる西方極楽世界に生まれたい」という「誓願」をしているが，これは「大乗的改変」と言える。ところで，『灌頂経』第十二巻には，「西方阿弥陀仏国に生まれることを願う」という言葉の後に，「憶念」（anusmarati　絶えず心に留める）という表現が付加されている。翻訳者の念頭にあった動作対象

は，神々ではなく「仏国」であったことになろう。

「憶念」という表現が翻訳文に残されていることから見て，『灌頂経』の訳者が使ったサンスクリット本にあったのは，初期仏教文献の伝統を継承する「神々のことを思うと，死後に天国に生まれる」という構想であったことになろう。そして，“devān”（神々を）に当てられた訳語「諸天」を見て、浄土信仰が盛んであった当時の中国人は「天」を場所と解し，「仏国」を心に浮かべたと考えられる。

さて，初期仏教文献でウパヴァーサが記述される際に，「信じること」（śraddhā 信）について説かれている。「信じること」を完全なものにすると，死んだ後でデーヴァとして生まれるというのである。しかしながら，『灌頂経』第十二巻には「信じること」への言及がない。ところが，サンスクリット本では，「信じること」が強調されている。しかしながら，教師としてのブッダを信頼するという初期仏教の基本姿勢が復活したというわけではない。『薬師経』に描かれる「八項目を伴うウパヴァーサ」は，初期仏典に描かれる「真理についての講演を聞く集い」などではなく，如来像を礼拝してその功徳の「廻施」を願う大乗の行事であった。

第一章第六節ではヤクシャが取り上げられる。『灌頂経』とサンスクリット本とはヤクシャの描き方が対照的であり，大乗仏教文学の発展を考える上で興味深い。『灌頂経』第十二巻では，願いごとのある人々が「鬼神」と呼ばれるヤクシャに礼拝し，供物を供えて誓いをする。ところが，サンスクリット本に登場するヤクシャは，人々の誓いを聞く立場から自ら誓いを立てる立場に変わっている。「三宝」への帰依を説き，大乗のボーディサットヴァとして「誓願」を述べるのである。

第二章には便宜的に「転輪聖王」という表題が付いているが，ここで桑原が試みようとしているのは，『薬師経』に見られるモチーフを『薬師経』以外の文献で検証することである。こうすることによって『薬師経』テキストの変化を跡付ける上で見通しを得ようとするものである。桑原が取り上げるのは，チャクラヴァルティン（転輪聖王）のモチーフである。サンスクリット本でチャクラヴァルティンが登場する場面は，『灌頂経』第十二巻に欠けていて，対応個所には「帝王家の子となる」とあるにすぎない。『薬師経』の原ヴァージョンが成立してからサンスクリット本が出現するまでに，チャクラヴァルティンのモチーフが持ち込まれたことになる。

代表的チャクラヴァルティンとして第二章第一節で取り上げられるのは，善見王という瞑想に耽る王である。この王の説話には二つの系列がある。一つはサンスクリット本『大涅槃経』などに伝えられるⅠ型であり，もう一つはパーリ『ディーンガニカーヤ』などに伝えられるⅡ型である。このⅡ型では善見王の超人化が進み，王は「法王」として登場する。伝統的なジャータカ形式では師匠である仏と弟子である王が対になって登場するが，Ⅱ型の系列の善見王説話は伝統的な基本形から逸脱している。

第二章第二節では『阿閦仏国経』を取り上げて，初期大乗文献の古い中国語訳に認められる初期仏教要素について検討する。そこで桑原は「玉女宝」のモチーフに注目する。善見王の后である「玉女宝」の描写にはいろんな変化形態がある。仏教の色彩が乏しい段階では，単に女としての美徳を備えていると指摘されるにすぎないが，さらに発展した段階では，夫の善見王がこの魅力溢れる妻に対して禁欲している。女の誘惑に屈しないというのが『阿閦仏国経』の重要テーマであり，「きれいな女のいる阿閦仏国経に生まれたい」と言う修行者が叱られている。欲望を断つことは初期仏教と大乗仏教に共通する課題である。阿閦仏国の女たちは健気に頑張る修行者ではなく，男たちが修行している場面の背景にすぎない。

「漢訳された阿含経典」という表題を付けた第三章では，中国の「庚申会」と仏教のウパヴァーサとの関係を検討して，中国におけるインド文献翻訳の問題点について論じる。「人間の体内に三匹の虫が生息していて，庚申の日の夜に天に昇って天帝に人間の罪を報告する」と中国人は考えていた。「庚申会」と呼ばれる行事は，これに基づいて成立したものであり，道教に起源があると言われている。ところが中国では，「庚申会」を仏教行事として行う人々がいて，学識ある僧侶から批判されていた。

桑原によれば，このようなことが起こったのは，中国人が全くの無知ゆえに道教行事を仏教行事と勘違いしたからではない。「何者かが夜間に天に昇って人間の行為を報告する」というモチーフは，初期仏教文献に見られるのである。インドの伝承によると，これが行われるのはウパヴァーサが行われる夜であり，報告先は天国の帝王インドラである。ただし，報告者は「三匹の虫」ではなく「四天王」である。

『仏説四天王経』という中国語文献があり，インドで行われるウパヴァーサについて述べているが，インド人と中国人では来世観が全く異なるので，翻訳者は非常な苦心をして，中国人向けの解説をしている。このような場合，たまたま用いら

れた語を文脈から切り離して「道教の影響」を論じても意味がなく，文献全体の流れの中で翻訳者の意図を読み取らなければならない。

論文審査の結果の要旨

インドでは文献が時代とともに変化する。全面にわたって体系的に改変がなされるのではなく，変化はしばしば無造作に部分的に起こる。変化を受けなかった部分は変化した部分との整合性を欠いたまま，理解し難い個所として残される。インドでは古い写本が残ることが少ないので，このような場合には，長い時間をかけて起こった複雑な変化の結果だけが残ることになる。テキストの古い形態を知るのは困難であり，現存テキストに残る理解し難い個所を元の文脈の中で読み解くことは容易でない。ところが中国では，しばしばインド文献が時代ごとに繰り返して翻訳される。各時代の翻訳はそれぞれ独立文献として扱われ，テキストがそれぞれの変化段階で凍結されて残されることになり，インド文献の変化を跡付ける上で貴重な資料となりえる。

今世紀になってから，インド北西の都市ギルギットの近郊で，『薬師経』のサンスクリット写本が偶然に発見された。テキスト変化の結果と思われる不可解な個所が多く，その内容はまだ十分に理解されているとは言えない。幸いにして，『薬師経』には成立年代の異なる四つの中国語訳があり，この文献の研究に役立てる可能性が考えられる。しかしながら，『薬師経』の研究史を振り返ってみると，一方には校訂作業を中心に行われたサンスクリット本の研究があり，他方には中国語資料を駆使して行われた異訳研究や偽経研究があって，互いに全く無関係で無関心なまま，情報を交換し合うことなど望むべくもなかった。

『薬師経』の中国語訳のうちで最古のものは，『灌頂経』と呼ばれる小経典集成の中に入れられている。すなわち，『灌頂経』の第十二巻がこれである。しかしながら，中国仏教史を専攻する研究者の間で，この文献はインド文献の翻訳と見なされておらず，中国人が作った「偽経」であると考えられている。「仏教呪術の効力を称えるために，道教に対抗して中国人が編纂した」と言うのである。

このような通説が広まった背景には，まず「大乗経典と初期経典との間には，越え難い断絶がある」という先入観があった。また，仏典から借用された表現が少なからず道教に取り入れられているにもかかわらず，中国化した仏教と道教との対立をことさらに大きく考える傾向があった。そのような立場で『灌頂経』第十二巻を読んで，とうてい「大乗仏教」あるいは「仏教」とは見なし難い要素が含まれていると思い込み，その起源を道教に求めようとしたのである。このような状況の中で，この『灌頂経』第十二巻が『薬師経』テキスト研究の資料として扱われることはなかった。

本論文の筆者はインド文献『薬師経』を課題として取り上げ，四種類の中国語訳，特に最古の中国語訳である『灌頂経』第十二巻を資料にして，これをサンスクリット本と比較した。まず通説を疑うことから始め，『灌頂経』第十二巻を「偽経」と見なす研究者が論拠として挙げるテキストの記述を再検討した。この作業を続けた結果，初期仏教文献と『灌頂経』第十二巻には多くの共通モチーフがあることを指摘した。そして，中国仏教史の専門家が道教的と決めつけた要素の多くについて，実は初期仏教文献に見い出しえること，そして仏教の伝承から逸脱したものではないことを指摘した。さらに，『灌頂経』第十二巻には，『薬師経』が伝えようとする大乗の構想が最も素朴な形で残っていることを指摘した。今までは「偽経」研究の対象でしかなかったこの文献を『薬師経』成立史の重要資料として扱おうとしたのである。そして，このような一連の作業を通じて，モチーフの継承という点で初期経典と大乗経典との間に連続性を見い出し，『灌頂経』第十二巻に残存していた初期仏教のモチーフは，時代が下がるとともに次第に大乗色を強めて変質していくと言う。

本論文では，今まで「偽経」と考えられていた古い中国語訳が大筋でインドの文献伝承に基づいたものであることが明らかにされ，テキスト発展史の古い段階を再構築するのに有効な資料として使えることが示された。サンスクリット・テキスト研究と中国語訳仏教文献の研究とが今まで断絶されていたことを思えば、『薬師経』の研究にとって，これは有意義なことである。しかしながら，提示された方法に大きな可能性があるだけに，この論文にはなお望まれる点がないわけでない。この種の研究では論述がテキストの読み方に深くかかわる以上，少なくとも使用した二つの主要文献，サンスクリット本『薬師経』と中国語『灌頂経』は，筆者自身の批判校訂本を添えるべきであった。そして，複雑なテキスト変化を扱おうとしているだけに，比較の対象となった文献の個所については，異同が明確に理解されるように，対照を示す際にもっと工夫

すべきであった。このような点については将来に期待したい。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成11年３月８日に審査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。